

有料会員限定 記事 今月の閲覧本数： 1 本 登録会員の方は月 10 本まで閲覧できます。

## 大腸がん啓発、ゲームで 医師の石井洋介さん

発信 コラム (社会)

2019/6/15 19:19 | 日本経済新聞 電子版

保存 共有 印刷 共有 ツイート f その他

一風変わったスマートフォン（スマホ）用ゲームの配信が7月にも始まる。女神の問いかけに答えて美少女キャラクターを集めるというありがちな設定だが、女神の質問は「今日の便の色や形は？」という内容で、腸内の細菌を擬人化したキャラクターが敵と戦う。



画像の拡大

医師の石井洋介さん（写真 山本博文）

その名も「うんコレ」というゲームは医師、石井洋介さん（38）らが開発に当たる。若い世代を中心に毎日の便のチェックを促し、女神を通じ便の状態を解説する。がんなど消化器系疾患の早期発見につなげる狙いだ。「名前はふざけているが、目的は大まじめです」

消化器の病気は痛みなど初期症状が出にくく、発見が遅れやすい。異状のパロメーターの一つが便の状態だ。胃がんは黒い便が出ることもあり、大腸がんは便秘と下痢が交互に続くことが多い。

だからこそ「便をよく見るのが大切。若者が受け入れやすいスマホ用ゲームを通じ『観便』を促せれば」と考えた。自らも大腸の病気に苦しみ、早期治療の大切さが身にしみている。

15歳の時、高熱が出て入院したら潰瘍性大腸炎という難病と診断された。症状が悪化して高校は休みがちになり、卒業後は家に引きこもった。19歳で大腸を全摘出し、人工肛門をつけた。

実は最初の入院の半年前に血便が出ていたが、恥ずかしさから放置していた。「便の状態を深刻に受け止めて早く治療すれば、悪化を防げたのでは」との思いが残る。

20歳で小腸を大腸に代用する手術を受け、元気な体を取り戻せた。「自分も人を助けたい」と消化器系の医師を志し、2年間の猛勉強で高知大医学部に入学した。

医師となってから進行した大腸がんの患者さんと向き合い、限界も感じた。早く治療に来てくれなければ、助けられないこともある。

健康に関心の薄い若い人たちに体を見つめる大切さを伝えたいと、ゲーム開発の母体となる「日本うんこ学会」というグループを2013年に設立した。メンバーはIT技術者やアニメーターらで、若者向けの大型イベントでトークショーを開き、インターネットで便の重要性を訴える動画を配信している。

皮膚への細かな振動で健康な時、病気の時の便の触感を再現できる機器をイベントで展示すると行列ができた。「硬い医療の話でも面白さをまぶして伝えれば、耳を傾けてくれる」と今、確かな手応えを感じている。

「セーブポイント」の模型 大好きなゲーム「ファイナルファンタジー」シリーズで、冒険中に体力を回復できる場所が「セーブポイント」だ。2018年に医学部の先輩と東京・秋葉原に診療所を開く際、セーブポイントのように「安心して体力や気力を回復できるところにしたい」と願い、「秋葉原内科saveクリニック」と名付けた。模型は受付の一番目立つ所に鎮座する。



🔍 画像の拡大

## 石井さんらが開発中のスマホ用ゲーム「うんコレ」

ゲームは石井さんら「日本うんこ学会」が開発し、IT技術者のほかにアニメーター、声優らがボランティアで制作に協力している。

ゲームは腸内の細菌を擬人化したキャラクター「メEDIUM」などが敵の「クリープス」と闘い、異世界「ウントピア」の平和を守るという内容だ。女神「カンベヌ」に日々の便の状況を報告すると、キャラクターを入手したり、強化したりできる



🔍 画像の拡大



🔍 画像の拡大

まずは女神に日々の便の報告をする

「便の状態」を問われるが、このときの形状の分類は医学用語で「ブリストルスケール」と呼ばれるものに基づく。黒色の便や下痢など異状が続くと、女神は熱や腹痛の有無も質問をしてくる。

報告が終わると、腸内の細菌を擬人化したキャラクターを獲得したり、強化したりできる。